

橋本さん 善友会

1. 善友会の成り立ちと発足

2017年2月22日に善友会といって超宗派の僧侶の研修会が京都の知恩院の和順会館であった。橋本住職は私に経営学部教授の立場から「寺院改革」についての講師を依頼してきた。

この背景には人口が減少する中で僧侶派遣会社が乱立し、お布施の低価格化や僧侶の質の低下に歯止めがかからなくなって、仏教寺院を取り巻く環境が激変していることがあった。そのため橋本さんは一念発起して、今後に不安を持つ寺院の中で志のある僧侶を集め、寺の経営や檀家の関係も含めて研鑽してゆき、新しいご縁の会を作ろうと思ったそうだ。今まで仏教界では先に述べたように「本末制度」の縦社会中心で、各宗派が分断され宗派を超えて交流することが少なかった。このような状況を改めるため、超宗派で横のつながりを作り、人材育成、寺院救済、経営改革などを議論する任意の団体として善友会を設立した。2013年に善友会のホームページを立ち上げ、2015年には第一回の研修会を開いた。この会の事務局は見性院にあり連絡事務を行っているが、会員は曹洞宗、浄土宗、浄土真宗、真言宗、天台宗、日蓮宗、臨済宗それに神道の神官を含め当初100名以上の人が参加した。しかし誓約書の提出などで縛りを厳しくしたので、現在の会員数は62名である。「善友」とは善行を共に修め、切磋琢磨して最高の友を得るといふ僧侶の別名だそうだ。それで優秀な僧侶の支援、救済、人材育成と現代僧侶の資質向上を目的とし、広く社会に貢献しながら、絶大な信用を得ていくことが使命だそうである。今まで関東を中心に会合を重ねてきたが、会員の中には関西地区に住んでいる人も多いため、関西善友会を発足させたが、今までの宗派内でのご縁から発展して宗派を超え、地域を超えた新しいご縁の関係と言えるだろう。

2. 関西善友会での講演.

それで善友会の第4回の研修会を関西で開くことになり、前述の2017年に京都の知恩院で開くので私に講師を依頼してきたのだ。他の講師はプロの井本全海住職(河内長野市勝光寺)で、「さあ、大変だ」と私のような素人が何を話してよいか困ったが、怖いもの知らずで下記のような内容をお話しさせて頂いた。

1) アメリカのキリスト教の牧師のサービス

信者との結びつきが強く、日曜日の説教については大変よく準備し、信者からは厳しい評価を受け、牧師の間では競争社会で日本の僧侶も彼らに学ぶ必要がある。

2) 宗教者としての僧侶

仏教の本来の目的は民衆を救うこと、信者の悩みを聞き、心の平安を与えることである。例えば葬儀の目的は:死者の追悼と悲しんでいる遺族への心のケアもしなければならない。しかし旧仏教は腐ったタイと言われるように、本来の宗教者としての使命を僧侶が忘れている。新興宗教は新鮮なイワシといわれ、むしろ彼らの方が不完全な所が多いが宗教者の使命を果たしているので、旧仏教の僧侶も本来の使命に立ち返るべきだ。

3) 寺院経営の2面性

寺院経営には2面性があり、一つはコミュニティーの視点で、みんなのお寺として、ベストなサービスをして檀家など受益者のコミュニティーに歓迎されなければならない。もう一つはビジネスの視点で、適正な利潤を上げて、事業やお寺の母体を継続維持する必要がある。その為には各寺院のコアコンピタンス(強み)を伸ばしてゆき、変えるものと、変えないものをはっきりする必要がある。

4) 寺院でのサービスの視点

儀式(葬式・法事)と法施(説教その他で信者に安心をあたえる)のバランスが必要で、究極には三方よしといって、お寺よし、檀家よし、世間よしでなければならない。

5) 今後の課題についての議論

① どのような寺院が生き残るのか?

檀家が多い寺院でなく、本山との関係が強い寺院でもなく、規模が大きく、組織がしっかりしている寺院でもなく、信者に如何に受け入れられるかである。

② どのようにすれば寺院の収益が上がるのか?

経営分析をして、利益を追求することでもなく、儲かる事業を見つけてそれを伸ばしてゆくことでもなく、地道に目的に向かって努力すれば、儲けは後からつい

てくる。松下幸之助や出光佐三など儲けを口にしなかった人ほど結果的には利益を上げている。

最後に善友会のメンバーが「寺院制度を改革して社会のために役立ちたい」と決意し、本気で「相手の立場に立ったサービス」を考えて、それを徹底的に実行すれば、日本の仏教会をひっくり返すほど大化けすると激励させていただいた。

3. 橋本住職との出会いと「開かれたお寺」

全く怖いもの知らずで、青二才がプロ(僧侶)の人々に大変偉そうなことをいったと大いに反省している。なお2018年の10月にも再度京都の知恩院で関西善友会の研修会の予定があり、また講師を依頼されているが、この会が少しでも発展することを願ってやまない。

橋本さんと私の出会いは、1999年頃サンフランシスコの当時の曹洞宗北米総監、秋葉玄吾老師が運営されていた「好人庵」という禅寺であった。そこでは定期的に坐禅会を開いていたが、橋本さんは駒沢大学大学院の博士課程を満期終了され、当時は好人庵のお手伝いをしながら、スタンフォード大学の宗教学部の研究員もされていた。

橋本さんとは馬が合い、一緒に宗教施設に出掛けたり、自宅によくきていただいたりした。橋本さんはサンフランシスコの前はロサンゼルス曹洞宗のお寺にも滞在していた。仏教寺院といっても、そこは日本のお寺と違い「開かれたお寺」であり、橋本さんには大きな刺激になったそうである。今回の檀家制度廃止に踏みこむのもこの体験が原点になったようだ。「開かれたお寺」とは信徒と開かれたご縁の関係で1)住職はお寺に住まず、別の住居がある。2)橋本さんはゲストルームに住んでいたが、そこは常時解放されており、自由に使えた、3)茶道や書道、座禅会、お花など文化教室を開いており、コミュニティーセンターのような役割を果たしていた。4)キリスト教の日曜礼拝のような月に一度の「祥月法要」を行い、その後食事会で親睦を図っていた。5)曹洞宗のお寺の半径1キロ以内に、真言宗、浄土宗、浄土真宗のお寺があり宗派を超えた会合をもっていた。

橋本さんの檀家制度廃止は上記の1)~4)を踏まえ、善友会の立ち上げは5)を踏まえており、このアメリカの留学経験がなければ今回の改革は断行できなかったと言っている。

また私にとって意外なのは橋本さんが「今日あるのは釣島さんの影響です」と言われた

ことだ。それは“致知”という雑誌と“理念と経営”といって私が創刊号から10数年にわたり寄稿している雑誌があるが、この2つの雑誌を橋本さんに紹介したところ、これらが橋本さんにとって大変刺激になっているとのことだった。家内曰く「初めてお会いしたとき、静かでやや控えめな方と思っていた。寺院改革をされるには相当の努力と覚悟がいるわ。やはり海を渡っていろいろな見聞を広めることってすごく大事だ、と今さらながら思う。経験が無駄にしない姿勢は立派」と。

私がサンフランシスコで橋本さんに出会ったのは、シリコンバレーに新しい会社を設立し、そのストレスを解消しようと禅寺に通っていた時だった。その時に橋本さんにご縁を得て、大変慰められたものだ。これらの機縁が重なって、橋本さんが日本に帰国して檀家制度廃止による寺院改革を断行された。さらに善友会という宗派を超えた新しいご縁の会を設立し、新たなご縁を紡いでいる。その会で私のような者が、講演させていただけのご縁を与えたことは人生にご縁は大変不思議なものだと思つづく思う。

橋本住職 宗派との縁

1. 檀家制度のあり方・シンポジウム

2018年5月9日に曹洞宗の総持寺系宗政会派「総和会」の北信越管区は「檀家制度の在り方」を考えるシンポジウムを松本市のホテルで開催した。この大会には大本山総持寺監院の乙川暎元老師を初め北信越の曹洞宗の僧侶が180人も参加したが、この大会のパネリストとして寺院コンサルタントの薄井秀夫氏などと一緒に見性院の橋本英樹住職が登場していた。

橋本さんは先に紹介したように2012年に檀家制度の廃止を断行した僧侶であるが、この時には旧檀家の一部では「そんなことをすれば、本山から破門されるのではないか」と大いに心配された。「檀家制度廃止」により橋本さんは本山からの破門はなかったが、周囲の曹洞宗寺院から「何をするのか」と猛反発を受けることになった。曹洞宗は全国での寺院数が15,000もある大組織で、「本末制度」で運営されている。「本末制度」とは永平寺と総持寺の2つの大本山の下に全体を統括する宗務庁がある。その下に県レベルで宗務所があり、埼玉県には2つの宗務所があり、さらにその下に教区がある。見性院は埼玉県第一宗務所の一つの教区に属しており、その中でも本寺と末寺がありピラミッド型の組織で全国を管理している。見性院は最末端の末寺になるが、教区のお寺の中では煙たがられ、彼らは曹洞宗の宗務庁にたいして、見性院の行動の是正を要請したりしている。いずれにせよ「本末制度」とは一つにヒエラルキーの組織である。

このように見性院は曹洞宗内では異端児で快く思われていない面もあるなかで、今回の北信越管区の宗政会が橋本住職を正式なパネリストとして招待したことは非常に画期的なことであった。この背景には「インターネットを使った僧侶派遣や葬儀、墓じまいなど様々な問題を突き付けいくと、今まで行ってきた檀家制度は制度疲労して、問題をタブー視できなくなってきた」という事情が出てきたからである。

2. 社会情勢の激変と他所の葬式プランの出現

いずれにせよ、現在の日本の政治・経済・社会情勢が激変しており、寺院側もその変化に対応していくことが大事だが、今までの旧態依然の「本末制度」での閉ざされたご縁の制度では時代の要請についていけなくなっている。

例えば「本末制度」では葬儀や法事はお互いに教区内で僧侶を派遣しあってすべて

寺院でのみ運営していくことを主旨としたが、寺院以外の参入も多く、見性院のような末端の末寺では、自由な寺院活動が制限されてきた。「本末制度」に大きな風穴を開ける事件として大手のスパイオンが 2009 年に始めた「イオンのお葬式」があった。ホームページに 185,000 円から 655,000 円までの葬儀プランを紹介し利用者が自由に申し込める制度であった。一般の人は今まで葬儀の相場が分からず困っていたが、オープンなこの制度は画期的なことだと言われ、新しい開かれたご縁の制度が受け入れられてきた。しかし問題になったのは「戒名料」の目安をイオンがホームページに公表したことだ。2010 年には全日本仏教会から「戒名をつけるのは値段のついたサービスではなく、人々の宗教心から出た寄付行為であり、課税対象になっていない」と反論した。それでイオンは仏教会に配慮して最終的に戒名料金の公表を止めることになった。次の事件は 2015 年に起きたアマゾンに乗せた「お坊さん便」である。これは IT ベンチャー企業の「みれんぴ(現よりそう)」が 35,000 円からの定額を払えばインターネット経由で僧侶を派遣し、法事などを執り行う(戒名、葬儀は別料金)ものであった。これに対して全日本仏教会では「宗教行為をサービスとして商品にしているもので、諸外国の宗教事情をみてもそのような例がない」と批判し、アマゾンに対して「お坊さん便」の販売中止を申し入れた。しかしアマゾンはそれを黙殺している。現実には 5 年で「お坊さん便」への問い合わせが 18 倍にも伸び利用者から大いに受け入れられており「開かれたご縁」の時代も大きく変わってきている。

3. 葬儀形式の変化と明瞭会計

一方で世間の動きでは、直葬^{じきそう}といって僧侶からの供養ぬきで遺体を直接火葬場に持ち込む人、樹木葬や海などへの散骨^{さんこつ}といって簡単に葬儀を行う人、家族葬といって簡略化した葬儀を行う人も増えてきている。それで今まで安泰であった寺院経営にも大きな風穴があいてきた。

このような状況をみると議論されている葬儀などは「宗教行為かサービス行為」であるかの問題は別として、従来の「本末制度」による、寺院だけで今までのような不明瞭なやり方で葬儀や法事を執行することは時代にそぐわなくなってきている。私は「葬儀や法事の時にいくらお布施を出せばよいか、相場が分からず戸惑っている」と聞くことがよくあり、お寺の法事や葬式のお布施の金額ほど不明瞭なものではなく困っている人を多く見かける。一方で葬儀社によっては喪主が急な出来事で混乱しているときに「〇〇様のお宅ではXXXの葬式をさせていただきました。お宅様の格式では・・・」と

言われ、びっくりするような値段の葬式をして後でしまったと反省している人の話をよく聞いたことがある。

以上の状況から橋本さんは見性院を開かれた「みんなのお寺」を目指しており、寺院改革の一つとして、明瞭会計や情報開示の観点から布施の定額を下記のように明示することにした。これはイオンの葬式やアマゾンの「お坊さん便」に対抗するものでもあった。

葬儀

位階	導師一人(通夜・葬儀)	導師+脇僧二人	一日葬(導師一人)
俗名(戒名なし)	10万円～15万円	20万円～30万円	8万円～13万円
生前戒名授与の方	10万円～15万円	20万円～30万円	8万円～13万円
信士・信女※	20万円～25万円	30万円～40万円	15万円～25万円
居士・大姉※	30万円～45万円	40万円～55万円	25万円～45万円
院居士・院大姉※	40万円～65万円	50万円～75万円	35万円～55万円

※印は戒名授与が含まれています。一日葬は通夜がございません。

この金額は一般に葬儀に100万円とか200万円かかったと今まで言われることに比べてかなり低額になっている。見性院でもかつては導師一人で葬儀・通夜(戒名:信士・信女)は50万円であったが、思い切って20万円に変更されたそうだ。

4. 質の高い葬儀と開かれたご縁を実証

法事や葬儀は「宗教行為かサービス行為」かについて大いに議論の分かれるところであるが、橋本さんは宗教行為でもあるが、昨今の利用者の変化をみるとサービス行

為での自由競争の時代になったと解釈されているようだ。

それで見性院では葬儀業者が行うセレモニー・ホールとは一味違う「本堂葬儀」を打ち出している。葬儀の質とは導師を務める僧侶の質、そして葬儀を執行する場所の質などで質の高い葬儀で供養したいと橋本さんは考えている。それでまず遺族の家に僧侶が出向き死者の横で「枕経」を上げる。その後、納棺を本堂に移し、セレモニー・ホールのような形だけではない本物の荘厳で彩られ、歴史を刻んだ鉦や太鼓、法具を使い厳かな雰囲気の中で葬儀を本堂で施行する。儀式の後、火葬が終わると再びお寺に戻り儀式を行い、墓地に向かうという一連の流れで、葬儀から墓地分譲までワンストップでより満足のゆく葬儀を行うそうだ。また墓地の販売についても、お寺の名義を借りて高額な値段で墓地販売業者が墓地を販売していたり、墓石についても業者が間に入り高額で販売されているのが現状であった。それを見性院では石材業者から直接仕入れることで、地域相場の三分の二の値段で墓地を販売しているそうだ。最近転勤などで先祖の場所から移住する人が多く、それに伴い墓を他の場所に移動することが多くなってきた。しかし檀家として寺院にある墓地か墓を撤去することは簡単ではない、改葬や墓じまいの時は高額の離檀料とを要求されることが多いが、見性院では檀家制度がなくなったので、離檀料は発生しないそうでここでも「開かれたご縁」を実行されている。

もし、お寺の事業がサービス行為とすれば、それがいかに利用者に受け入れられるかの競争でありその数字が結果を表すことになる。見性院では収支計算書や財産目録などの数字を公開している。それによれば、橋本さんが2007年に先代からお寺を引き継いだ時の収入は2000万円～3000万円であったが、2017年の決算では1億5千5百万円の収入があり、わずか10年で約6倍にも収入が伸びており、この結果の数字がいかに見性院の取り組みが社会に受け入れられたかを雄弁に語っている。

この事業の発展に基づいて見性院では常勤僧侶5名、非常勤僧侶5名、事務職員5名が勤務しており、完全に中小企業のような形態で発展している。

橋本さんの話を聞いていて、封建時代の名残の「本末制度」のような「がんじがらめのご縁」ではなく、これからの寺院は時代の変化に応じて「開かれたご縁」に変貌しない限りその経営はむつかしくなると思う。

橋本英樹さん

随縁会

1. 宗教・宗派・国籍不問の霊園

JR 上信越新幹線の熊谷駅を降りると、私のアメリカ時代からの敬友の橋本英樹さんが出迎えてくれた。車で10分、見性院という橋本さんがご住職をされている420年続く曹洞宗のお寺である。このお寺に入山してみると、境内に362区画の宗教・宗派・国籍不問で入れる熊谷霊園があった。曹洞宗に限らず仏教の各宗派の方のお墓があり、中でも十字架を刻んだキリスト教の方の墓が設置されているのにまず驚いた。

霊園の前には永代供養のための納骨堂があり、最近子孫からの供養が期待できなくなり、死後はお墓よりも納骨堂で永代供養してもらおう人が多くなっているそうだ。見性院の納骨堂での一つの話は宅配便(ゆうパック)による納骨制度で、近親者の遺骨を家で保管したままその処置に困っている人が意外と多く、納骨セットというパックを3,000円で販売し、それに遺骨をいれてゆうパックで見性院に送り、30,000円を支払うと供養し納骨堂に遺骨を納めてくれる。この制度は遺骨をゆうパックで送り、依頼者がお寺にもゆかず納骨するなど宗教的に見ても何事かと、一時宗教関係者やマスコミなどから痛烈に批判を受けた。橋本さんに最近の状況を聞いてみると、他のお寺でも宅配便納骨を受け付ける所が増えて批判も少なくなり、見性院ではコンスタントに毎月10~15の宅配便納骨があるそうだ。納骨堂の問題として多くの人と一緒に納骨するので、個人の墓誌がないことであった。この問題を解決するために字彫という大きな御影石の合同墓誌の碑があり、納骨した人で墓誌が欲しい方は30,000円で故人の戒名または俗名や命日、享年を碑にそれぞれ刻んでくれる。興味深かったのは生前字彫といって、生前の親しい仲間や夫婦など遺骨を将来納骨してもらおうが、墓誌に死後も仲良くするよう生前に隣合わせに名前を刻んでもらうというもので、そこには死後もお互いに様々なご縁が続くようにとの心情があると思う。また動物愛護供養塔といってペット供養の納骨堂もあったが、ここにも字彫の墓誌があり、名前は山田ボチ(愛犬)、田中ミヤオ(愛猫)など字彫りして、飼い主の姓がつけてあったが、人間だけでなく飼い主とペットの強いご縁が感じられた。またペットの葬儀は火葬してくれる車(移動式ペット火葬炉)が見性院まで来てくれ、その場で簡単な葬儀と火葬をして納骨するサービスがあると聞き驚いた。その他水子供養サービスの地藏菩薩の像もあり、死産の方が多く供養されるようだ。

2. 寺院改革と檀家制度の見直し

私は前述のように見性院に入山するなり普通のお寺の違いに驚かされたが、この橋本英樹さんこそ、現在の寺院改革の旗手として、新聞、雑誌、テレビなど頻繁にマスコミに登場している僧侶である。橋本さんは2007年に先代の父上からお寺を継ぎ正式に住職に就任された。その後、地下に溜まっていたマグマが一挙に地上に流れだしたように、橋本さんの長年溜まっていた寺院改革のエネルギーが爆発しついに2012年6月には檀家制度を廃止し世間の話題を呼んだ。マスコミに初登場するのは2013年8月28日にテレビ東京の「ワールドビジネス サテライト」であり、最近では頻繁にテレビ、新聞、雑誌などの取材を受けている。見性院が廃止した檀家制度とはどのようなものか見てみよう。それは江戸時代の島原の乱の後、幕府は人民の統治の手段として宗門人別帳という戸籍制度をつくり、その運営を寺院に委ね誰でもどこかのお寺に属する寺壇制度が出発点であった。この檀家制度によりお寺を中心として先祖供養、寺子屋などの教育、地域一帯の一部の行政、個人の生活相談など今でいうコミュニティ活動を行ってきた。特に寺子屋では「読み、書き、ソロバン」を子どもに教えていたが、子どもは7～8歳で入学し、授業は朝7時～午後2時半ごろまであり、年間の休日は50日前後しかなかった。江戸時代末期になると子どもの就学率が70%を超え識字率も高まってきた。身分や職業により大きくことなるが、男性の40%程度が読み、書きが出来たのでないかと言われ、寺子屋の果たした役割は大きい。一方で檀家は菩提寺に戸籍を保証され、葬儀もしてもらい宗教的な安心を得る代わりに、経済的にお寺を支えていた。またお寺は行政の末端機関を担当していたので、幕法では檀家がお寺から離れることが禁じられていた。今でいえばお寺の住職は公務員や教師の一部の役割を果たしたことになる。

明治時代になり廃仏毀釈がありその後は檀家がお寺を離れることが出来るようになったが、地方では地縁、血縁を重視した家制度が健在で、最近までは地域の名士や旧家など有力者を中心に地域をまとめお寺を支える制度が存続してきた。また明治以降は殆どの宗派で僧侶が妻帯できるようになり、これでお寺の住職も世襲することが多く、檀家とお寺は固定しがちになった。それでお寺の収入はすべて檀家に依存し、檀家は先祖代々のお墓によってお寺に縛られていた。しかしこの檀家とお寺が固定しているのも、檀家がお寺を変えられないと同時に、お寺も新しい檀家を増やすことができず、ある意味では腐れ縁のような関係になった。檀家も時代と共に宗教心が薄くなり葬祭費を安くあげてくれることを考え、お布施も減らし、家制度の崩壊と、人口減の過疎化によ

り檀家数も減少し、お寺の経営が難しくなってきた。現在日本ではお寺が 75,900 あまり存在し、コンビニエンス・ストアの 53,300 よりも多いといわれているが、2015 年 10 月の朝日新聞の調査によれば、住職のいない無住のお寺が 12,065 寺に増えお寺全体の約 16%に上っている。さらに少子高齢化や人口の大都市への流出などにより、将来お寺は4割も消滅するという予測もあり、寺院経営も非常に難しくなっている。

3. 檀家制度廃止と寺との新たなご縁

それで、橋本さんはこのような袋小路に追い込まれた寺院経営を打開するには「お寺が檀家から自由になる、信徒がお寺から自由になること」で、「すべてはそこから始まる」と確信したそうだ。それには思い切って「檀家制度の廃止しかない」と考えて 2011 年 4 月のお寺の役員会に「檀家制度の廃止」を図ったそうだ。すると「お寺が潰れるのではないか」「近隣の院との関係はどうか」「本山から破門されてしまうのではないか」など会議は大紛糾した。この問題は感情的にも一筋縄ではいかないので、橋本さんは、議論を尽くし、根気よく説得を続け会合を重ねていった。最初の役員会から 1 年 3 か月後の 2012 年 6 月に全員一致ではないが、「檀家制度廃止」に踏み込むことができた。檀家制度の廃止により、従来のお寺と檀家の関係は白紙になり、お互いに縛ることも見返りを求めることもなくなった。それで旧檀家さんには、賛同して頂ける方には信徒に移行して欲しいと連絡し、賛同された方は新たに信徒になってくれ新しいご縁の関係が始まった。信徒は檀家と違うので寄付や毎年支払っていた、護持会費、墓地の年間管理料を負担する必要がなくなり、見性院に墓だけを持ち、信徒をやめて他のお寺に法事を頼むこともできる。一方で見性院も開かれたお寺として、お墓の利用者も宗教や宗派を問わず広く募集し、先に述べたようにキリスト教の方のお墓もできた。また永代供養も全国から受け入れている。日本の法律では信仰の自由を規定されていながら、これが制限されている面もあったが、これで本当の意味の信仰の自由が確保されたことになった。

私見を述べてみると、檀家と寺院を固定することは封建時代の遺物に見えてしょうがない。例えば私は浄土真宗の檀家の家に生まれたが、大学に入学し仏教青年会に入会したが、指導僧侶は酒井得元老師(駒沢大学教授)で禅宗の指導を受け、その後アメリカ生活でも禅宗の修行をしてきたので、浄土真宗よりも禅宗に興味があり禅宗の信者だと自認している。先祖から檀家といっても私のように宗旨替えする人も多く、なによりも子孫が転居されお寺の方から見ても檀家の関係を維持することが難しくなっている。それでお寺とのご縁の関係は橋本さんが言われるように、檀家制度を離れて「信

仰の自由」の精神からその人々の趣向に合ったお寺とご縁を結ぶべきだと思う。

4. 随縁会とみんなのお寺

檀家制度を解消して三年たったころ、信徒との会として「随縁会」を立ち上げた。「随縁」とは一般には「縁に随[したがって]物が生起し変化する」意味であるが、見性院では「縁を貴び、仏に帰依し、縁に報いる」という意味を込めて「随縁会」とした。

随縁会の会員は「特別会員」「普通会员」「自由会員」の3つがある。

「自由会員」は見性院の墓地を利用している人で、それ以上の関係は自由な人、「普通会员」は葬儀や法事を見性院で行っている人で、見性院の行事にも参加される人、「特別会員」は見性院に深く関与され、行事にも積極的に参加される人だそうだ。この三つの会員とも会費は全て無料で運営されている。それで「特別会員」が上で「自由会員」が下という意味でなく、信徒は自分の事情でどの会員になるかを選び期限内に見性院に「承諾書」を提出するもので、個人の自由意思を尊重している。

このように檀家を廃止することに対して、約400軒あった旧檀家に大きな戸惑いを与えたことは事実である。見性院の旧檀家は市街地と農村の両方にまたがっていたが、市街地の若い世代は概ね新しい体制に賛同してくれたが、農村部での旧檀家には違和感を持っておられた方もいた。一部の人で賛同しない方もおり見性院の方針を批判している人もいる。橋本さんは見性院のことをすべての人に開かれた「みんなのお寺」といっており、「みんなのお寺」とは寄付・年会費、管理費が不要で、宗教・宗派・国籍を問わず利用できるお寺のことだそうだ。

いずれにせよご縁の関係でいえば、旧態依然の檀家制度は制度疲労しており、見性院のような信者との自由なご縁の結び方こそ、これからの寺院に求められており、この改革についてゆけない寺院は消滅せざるを得ないと思う。そのような意味で「縁を貴び、仏に帰依し、縁に報いる」という随縁会の行き方は大いに参考にすべきものだと思う。